

## Q21

児童生徒の固定的な人間関係が学校の課題としてあがる小規模校です。この問題の解決のために、どのような取組をすればよいですか。

**A** 最も大切なことは、児童生徒一人一人を大切にしようとする教員の意識です。教員自身の姿勢こそ、よりよい集団づくりの基盤となります。

### 【人間関係の固定化が生み出す弊害】

人間関係の固定化がどんな弊害をもたらしているのかを先ずはしっかりと捉える必要があります。固定化した人間関係の中では、児童生徒は自分らしさを十分には発揮することができないということです。「勉強できない子は他のこともできない。」「乱暴な子は乱暴」といったような決めつけが集団の中で生まれたり、教員が支援をしすぎて児童生徒が自分自身の「もっている力」「よさ」を引き出すことができなかつたりすることなどが原因として考えられます。言い換えれば、教員が、児童生徒一人一人の持っている力を十分に引き出していないということになります。

### 【固定化したクラスの人間関係を改善できるのは教員（わたし）です】

人間関係が固定化するとは、集団の中で生まれた力関係をその集団自身の力では改善していくことができないということです。クラス替えのない集団の中で、このような状況を改善できるのは、新しくその集団に加わった教員である「わたし」しかいません。

何より大切なのは、児童生徒一人一人の「もっている力」「よさ」を教員が理解し、それを周りに伝えていくことによって他の児童生徒の見方を変えることです。そうすることが、教員と児童生徒の信頼関係の基盤になります。

例えば、朝の会での何気ないつぶやきの中で、あるいは学級便りの中で、教師が気づいたAさんの「よさ」を他の児童生徒に広げることです。また、児童生徒相互の傾聴やコミュニケーション技能を高めたり、体験的な活動を取り入れたりする中で、自尊感情を育てることも大切です。そうすることで、集団はAさんの今まで気づかなかった部分を認め、Aさんは集団への所属感を高めることができます。

### 【教職員集団で育てる】

「自分の大切さとともに他の人の大切さを認めること」ができるために必要な人権感覚は、児童生徒に繰り返し言葉で説明するだけで身に付くものではありません。人権感覚を身に付けるためには、学級はじめ学校生活全体の中で自らの大切さや他の人の大切さが認められていることを児童生徒自身が実感できるような状況を生み出すことが肝要です（在り方編P8参照）。

児童生徒一人一人の「もっている力」「よさ」を集団へ広げることが教職員集団で共通理解を図り、それを実践していけば、一人一人の児童生徒が自分らしく生活でき、学校全体がのびのびとしたものになると考えられます。

### ふりかえり

児童生徒の「もっている力」「よさ」を広めるために、あなたはどのようなことに取り組んでいますか。または、取り組めばよいと考えますか。